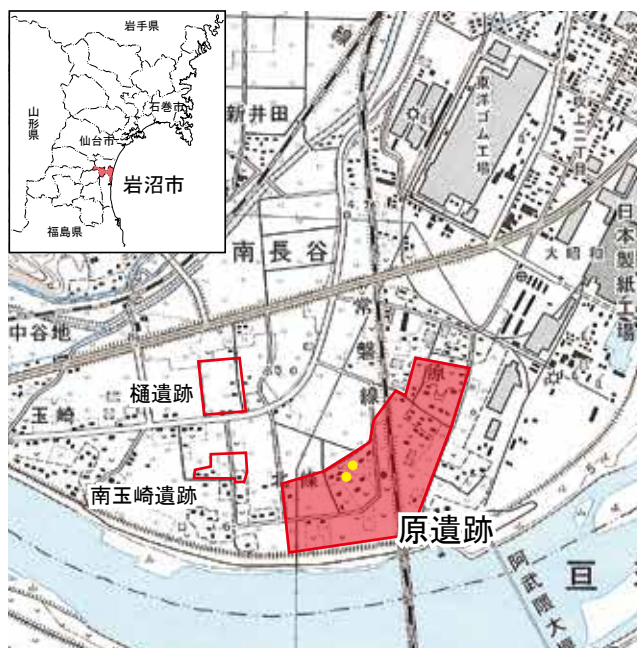


# 原遺跡第7次調査 現地説明会資料

岩沼市教育委員会 生涯学習課

## 1. 調査要項

所在地	岩沼市南長谷字北上 地内
調査原因	重要遺跡範囲内容確認調査
調査指導	原遺跡調査検討委員会
調査期間	令和4年8月～11月下旬
調査面積	I区 255 m <sup>2</sup> 、II区 137 m <sup>2</sup> 計 392 m <sup>2</sup>
調査機関	岩沼市教育委員会 (担当：生涯学習課)
調査協力	宮城県教育委員会文化財課 多賀城跡調査研究所



遺跡位置図

## 2. 遺跡の歴史的環境

原遺跡はJR岩沼駅の南方約3.2 kmに位置し、岩沼市南長谷字原・上原地内などに所在します。遺跡範囲の中央ではJR常磐線が南北に通っていますが、この常磐線を挟んだ東西の標高は5m前後と大差がなく、阿武隈川左岸で形成された東西方向にのびる自然堤防上で遺跡が営まれています。

10世紀頃に成立したと考えられている『延喜式』で東山道陸奥国に設置された駅家<sup>えんぎしき</sup>をみると、「玉前」という地名が認められます。さらに多賀城跡より出土した9世紀代と推定されている木簡<sup>うまや</sup>でも「玉前割」という名称<sup>たまさき</sup>が記載されています。これらの資料の存在から、多くの研究者が古代の岩沼市の玉崎地区周辺に「玉前駅家」が設置され、また関所の機能を有すると考えられている「玉前割」も存在していたと考えてきました。

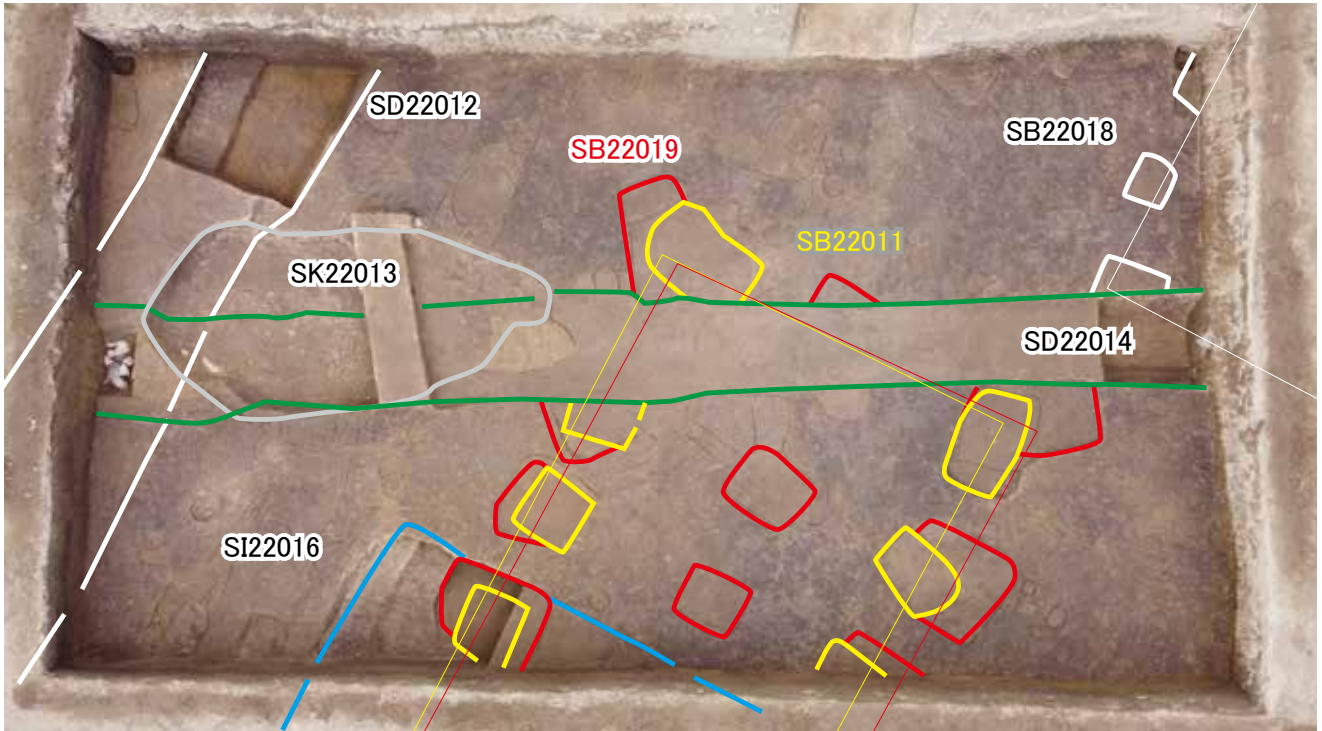
平成28年度の第1次調査以降、原遺跡内にこれらの施設の存在が考えられるようになり、調査を継続していく中で徐々にその姿が明らかになりつつあります。



北側上空から望む調査地 (○は互理町三十三間堂官衙遺跡)

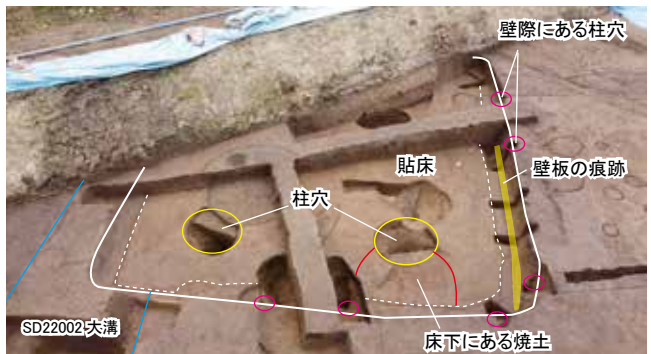


多賀城跡から発見された「玉前割」の木簡



Ⅱ区で発見された主な遺構の配置

取りがなされています。この2穴の柱間の距離は2.8 mを測ります。本遺構の床面は2時期存在する可能性があり、旧段階の床面には多量の焼土を含む遺構が存在しています。周溝は東壁では良好にみられますが、それ以外では良好にはみられません。なお、東壁と南壁では壁柱穴と考えられる小柱穴が存在しています。



S I 22001 竪穴建物の構造

出土した遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器碗、刀子とみられる金属製品であり、土師器ではロクロを使用しています。出土した遺物の年代観から、本遺構は9世紀後半頃に機能していたと考えられます。

**【SD22002・22012 大溝跡】** I区北東部・西部、Ⅱ区西部で確認されてきました。本遺構は第6次調査で発見したL字に屈曲する区画溝であるSD21002の北辺及び西辺の延長部分です。確認した大溝の規模は、上幅1.8～2.0 m、下幅0.6～0.8 mで、確認面からの深さは80 cmを測ります。堆積土層の断面観察から新旧の2時期にわたる利用がなされていることが確認されています。出土した遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器瓶、鉄鏃があります。出土した遺物の年代観から、本遺構の新段階は9世紀前半頃に埋没したとみられます。



S D 22002 大溝の土層観察





I 区で発見された主な遺構の配置

### 3. 第7次調査の成果概要

第7次調査では、これまで古代の掘立柱建物跡3棟、竪穴建物跡2軒、溝跡10条などの遺構が発見されています。以下に今回の調査で発見された主要な遺構をみていきます。

#### 【SB22011・22019 掘立柱建物跡】

Ⅱ区中央から東寄りに位置します。SD22014 溝跡より古く、SI22016 竪穴建物より新しいものです。柱穴の位置からSB22011は、SB21019の建替えと考えられます。建物の規模は桁行3間以上(5.8m)、梁行2間(4.9m)の南北棟で、主軸方位は真北に近似するとみられません。現段階では遺物の出土がほとんど無く、詳細な年代推定は今後の課題ですが、西側に位置する真北方位のSD22012大溝が8世紀代の機能と考えられるため、本遺構についても同様の時期の所産である可能性が高いと考えられます。なお、SB22011の前身とみられるSB22019では、床束の可能性のある柱穴を伴っています。



SB22011・22019 掘立柱建物跡（南から）

調査の結果、はじめに赤いラインのSB22019が建てられ、その後ほぼ同じ場所に黄色いラインのSB22011建物がつくられたことが明らかになりました。

【SI22001 竪穴建物跡】 I区北部西寄りに位置します。SD22002大溝と重複し、これより新しいものです。本遺構の北側は調査区外へ広がるため、全体の形状・規模については不明な点がありますが、北東コーナーの一部が認められることから南北6.2m、東西5.8mの南北方向に縦長となる形状であると考えられます。カマドは、第6次調査で煙道が確認されていることから北カマドです。床面は褐色砂質シルトを主として用いられ、主柱穴が3穴確認されています。断ち割りを行った南辺の主柱穴では、いずれも柱材の抜き

#### 4. まとめ

- ① I 区の調査では、大溝が9世紀後半には完全に埋没していたことを確認しました。
- ② II 区の調査では、大溝が第6次調査で発見されたコーナー部分から45m以上延びていることが明らかとなりました。
- ③ II 区では、真北方向を意識した複数の掘立柱建物が存在することを確認しました。特に SB22011 建物跡と SB22019 建物跡は、同位置で同規模の造り替えが行われていたことが明らかとなりました。
- ④ II 区で発見された掘立柱建物の中には柱筋をそろえているようにみられるものもあり、区画の内部には整然と建物が配置されていた様子が伺えます。



原遺跡第6・7次調査（A-1・2地点）で発見された大溝と8世紀代の掘立柱建物群